

編集後記

『戦史研究年報』第13号をお届けします。

第13号の編集にあたっては、「戦史叢書刊行完結30周年記念号」的な色彩のもとに、より多くの読者諸兄に興味深くご高覧いただける内容に仕上げることを目標にしました。

「史料紹介」は、陸軍大臣秘書官を務めた「西浦進（初代戦史室長）の『東条英機アルバム』、戦史叢書『中部太平洋陸軍作戦』執筆の下資料である「元戦史編さん官・福重博の『中部太平洋戦史資料』、「戦史叢書」刊行完結を記念して市ヶ谷台に建立された「石碑『戦史室跡』の碑文」を掲載しました。

「論文」は、戦史部所属研究者による平成20年度調査研究成果の中から、3篇を掲載しました。岩谷論文は、近年公開が進んでいる中国側史料に依拠して、1936年以降の日中国交調整交渉で中国側が条件を上方修正したのは、「中国国内情勢の好転が蒋介石に対日妥協路線からの転換を促した」結果であると論じています。立川論文は、太平洋戦争中に4回決定された戦争指導大綱の策定過程において、陸軍側が常にイニシアチブをとっていたこと、大本営政府連絡会議や最高戦争指導会議が実質的な審議の場になったことなどを指摘して、戦争指導と作戦指導との関連の研究への道すじを拓いています。和田論文は、小磯内閣期の第3回戦争指導大綱の策定過程と東條内閣期の第1回及び第2回戦争指導大綱のそれとを比較することにより、第3回戦争指導大綱の策定過程の特色を明らかにしようと試みた稀有な論文です。

「寄稿」は、「戦史叢書」を執筆された元戦史編さん官からは執筆当時の経験談を、「戦史叢書」を活用される研究者からは元戦史編さん官との思い出、「戦史叢書」の意義と限界及び今後に期待することがらを、それぞれ忌憚なく記していただいた原稿を掲載しました。

「研究会記録」は、防衛研究所戦史部が平成21年10月に実施した研究会において、英国ロンドン大学キングス・カレッジ副学長であり、フォークランド戦争の公刊戦史執筆者であるサー・ローレンス・フリードマンが公刊戦史執筆者の立場・苦悩及び執筆後の指摘について発表された論文を掲載しました。

「国際会議参加報告」は、ポルトガルのポルト市で開催された第35回国際軍事史学会大会の概要及び同大会で立川主任研究官が発表した論文を日本語で掲載しました。

「活動報告」は、平成21年に戦史部が実施した諸活動、プロジェクト検討など戦史部が将来に向かって歩む方向性、図書館史料閲覧室の閲覧状況等を掲載しました。

最後になりましたが、本号発刊のためにご協力いただきました関係各位に厚く御礼を申し上げますとともに、今後とも、さらなるご協力を頂戴できますよう、お願い致します。

（高橋 文雄）